[成果速報]

いちご育成系統の先端まだら果発生調査

【背景】

いちごは、果実先端部がまだら状になる障害果「先端まだら果」が発生する場合があり（写真：左）、正常果に比べ外観が劣るため、出荷出来なくなることが問題となっています。先端まだら果については、低温や窒素成分が多いなどの栽培条件で発生が増加する傾向がある一方、発生しやすい品種・系統があることが明らかとなっています。そこで、いちご系統の先端まだら果発生株率を調査し、育種素材としての適性を評価しました。

【結果】

評価は 19～21 年交配系統を対象としました。先端まだら果が発生しやすい低温及び窒素成分が多い条件とするため、保温開始後の温度管理をいちご研究所内の慣行温度よりも低い最高温度 20℃（最低夜温は 8 ℃）とし、無機窒素が発現しやすい畝上げ後のクロルピクリン消毒を行いました。

その結果、対象品種の先端まだら果発生株率は「品種 A」で 0%、「品種 B」で 100%となり、**発生が多くなることを想定した栽培条件下では先端まだら果が発生すること、また、遺伝的要因が大きいことが確認されました**。また、その条件下における交配系統の状況は、先端まだら果が未発生の系統は 11、発生が見られた系統は 9 となりました。

今後も、育成系統の先端まだら果の発生程度調査を定期的に実施することで、発生リスクの少ない育成系統を選定し、交配母本として活用していきます。

表　先端まだら果の発生状況

供試育成系統	発生率（%）	系統数	
19～21年交配系統	0	11	未発生
	17	4	発生 9 系統
	33	3	
	50	1	
	67	1	
品種A	0	1	
品種B	100	1	

写真　先端まだら果発生例（左）と正常果例（右）

（いちご研究所　柳堀　真由）